

久しぶりの朝鮮通信使遺跡踏査

朱 莉 麗

私と朝鮮通信使研究とのご縁は、『朝鮮通信使文献選編』（全五冊、復旦大学出版社、二〇一五年）という史料の編集計画を立ちあげたところから始まった。この史料集を編集する仕事を任されたことをきっかけにして、私は通信使研究という新しい分野に触れた。朝鮮王朝が徳川幕府に派遣した使節団の通信使は対馬海峡を渡って江戸に向かう途中、たくさんの島と港に寄港した。元々日中交流しか知らなかった私は文献によく出てくる朝鮮通信使が寄港した日本の地名に悩まされたので、それらの地名の意味と歴史を説明しようという計画を立ちあげた。二〇一六年から、私は度々日本に来て通信使関係の港と島の史跡調査を行ない、調査レポートを作ってきた。しかし誰も予想できなかった新型コロナウイルス感染症蔓延のため、二〇二〇年からその調査は一時的に中断を余儀なくされた。それから約三年を経て調査をようやく再開できたのは、日文研に来た後の二〇二二年の一月月である。

これまで既に対馬・下関・下蒲刈・鞆・尾道・日比・牛窓・室津では調査を行なっていたので、今回は福岡の相島と山口の上関での調査を中心に行なった。通信使は相島のことを藍島と記録し、杵岐から下関に向かう途中でここに泊まった。今は日本の有名な「猫島」の一つとして世間に知られている。江戸時代には福岡藩が通信使を接待するため、ここに館舎を建てた。福岡藩は通信使一行を迎えるために毎回客館を新築し、帰国後はそれを解体したので、通信使

の相島の館舎に対する印象は、いつも「新しい」だった。

新宮町渡船場から相島渡船場までは約二〇分かかる。船の右側に座ると、相島に着く直前に鼻栗瀬という海食洞が目に入った。美しく変わった形のため、通信使がそれを特筆した例は少なくない。栈橋を降りて道を出ようとすると、「朝鮮通信使客館図」の看板が目に入ってきた。看板の左側に招き猫像が立っており、像の左側に石があつて、「朝鮮通信使ユネスコ世界記隣」の一一文字が二行に分けて彫られている。また石の左側には、「朝鮮通信使ユネスコ世界記憶遺産登録」と縦に書かれた薄い板が無造作に立っている。相島の栈橋には前波止が隣接しており、そこから約一〇〇メートル離れた場所には先波止がある。前波止も先波止も福岡藩が江戸時代の天和二年（一六八二年）に通信使を迎えるために整備したものである。先波止は朝鮮通信使一行の上陸用であり、前波止は通信使を護送した対馬藩主とその従者が上陸する際に用いられた。規模的には、先波止は前波止より少し大きい。相島には大川がないので、急に何百人もの接待が必要になった場合、飲料水の確保が大きな問題になる。元々相島には四つの井戸しかなかったが、通信使一行の用水を確保するために一二の井戸が相次いで掘られた。現在は若宮神社の奥と民家が建ち並ぶ御茶屋跡に二つの井戸が保存されている。

相島は公共交通が不便で、私のような外来者は、自分の足で探索するしかない。相島の史跡は多く、分散しており、通信使関連の遺跡のほか、江戸鎖国期に建設された外国船を監視する遠見番所跡、豊臣秀吉の朝鮮侵略時に将兵たちが崖の洞窟の観音様に利生を祈願するために積み上げた石積みと伝わる太閤潮井の石、古墳時代の積石塚などがある。以上の江戸時代、豊臣時代、古墳時代の遺跡を経て、今回の相島調査の最大の関心事である「合葬舟人墓」という供養碑に到着した。享保四年（一七一九年）の七月二四日、第九回通信使を迎えるため、福岡藩

の藩士と水夫が海岸で準備作業を行っていた時、不意に台風が襲来し、避難できなかった六一人は命を奪われた。元々相島の長井浜には古墳時代に建てられた積石塚が多く分布しており、考古学者らが発掘調査を行ったところ、江戸時代の墓地をも発見した。うち四つの墓石には享保四年七月二四日の日付が判別でき、『黒田家文書』の記載と合致するため、これらが通信使の接待準備の作業時に遭難した人の墓であることが確認できる。墓地から東南に少し歩くと、雑草に囲まれた円柱形の石碑がある。碑の正面には「合葬舟人墓」という五文字が刻まれており、背面には「韓使來聘」を含む六三文字が読み取れる。この碑が通信使接待準備中に亡くなった人たちを供養したものであることが先行研究によって明らかにされている¹⁾。この辺りから玄界灘を見渡すと、先ほど船上ではっきり見えなかった鼻栗瀬が目の前だ。



相島の百合越浜の「舟人合葬墓」供養碑

栈橋から相島の北側を歩き、島の東の端にある百合越浜を訪れた後は南側を歩いたが、南側にはほとんど遺跡がない。私は約三〇分歩いて栈橋に戻ってきた。昼食後、私は乗船券売り場の女性が通信使客館の遺跡碑が神宮寺の近くにあると教えてくれたのを思い出した。午前中は見かけなかったもので、もう一度探しに行くと、先ほどの女性がちょうど日干しした布団を回収しているところに出会ったので、遺跡碑ま

で案内してもらった。碑は神宮寺に行く途中のやや広い畑の上に立っていた。碑文により、客館の敷地は東西六五間（約一一七メートル）、南北七〇間（約一二六メートル）であったことが分かった。その根拠は通信使第十次来島の時の客館図、すなわち前述の看板の図である。この碑は私的な寄付で建てられたものであり、地元の人々の通信使への関心も示している。私がお昼を食べた丸山食堂の壁には、相島の小学生たちが手掛けた平成六年の絵画や作文が掛けられている。作文の題材はすべて前波止と先波止に関するもので、おそらくテーマが決められているものだろう。小学生たちは作文で「（一六八二年）相島の人たちは二カ月かけて波止を建設し、今も私たちの生活の中で機能している」「波止は通信使の船を停泊させるために作られたもので、今もここにある。人々が苦勞して作った波止は、昔も今も機能している。大切に使いましょう!」と書いている。取り壊された通信使客館とは違い、前波止と先波止は今も相島人の生活の中で役割を果たしており、停泊のほかに釣り場所としたり、台風による被害をある程度軽減したりする効果もある。この二つの波止は相島の人々が海と向き合った数百年の生活の証人ともいえる。

相島を出た後は福岡から新幹線で徳山へ行き、在来線に乗り換え柳井まで行ってからフェリーを利用して上関まで来た。上関は下関と同じく山口県に属している。しかし、今の上関は通信使が「関は下関と同じように繁盛している」と記録しているのとは異なり、下関とは比べられないほど小規模な町で、二〇〇〇人くらいの人口しかない。通信使は下関を出た後、今の山口県防府市の向島を経て、上関に来た。上関は江戸時代には下関と同様に毛利氏が支配する萩藩に属していたため、毛利氏は代官に委任して寄港した通信使をもてなした。

上関の埠頭は非常に小さい。海岸沿いの上関町のメインロードになっている。道の片側は海

で、反対側は商店街である。海辺の商店から緩やかな山の斜面に沿って、建物はすきまなくびっしりと並んでいる。多くは民家である。上関の通信使の遺跡はすべて埠頭に近い場所に分布している。江戸時代、上関には通信使の宿として、とても立派な御茶屋が建てられていた。現在は発掘によって御茶屋の規模と構造が完全に把握されている。御茶屋は海岸から遠くない山の斜面に建てられている。通信使が上陸した栈橋は「唐人橋」と呼ばれ、雁木の上に一時的に架けられた。「唐人橋」は通信使のためだけに使用され、通信使が使用し終わるとすぐに撤去された。また、通信使が土を踏まないように、「唐人橋」から御茶屋へ向かう道には筵が敷かれた。通信使正官の正使、副使、従事官だけでなく、随従官吏や従僕も同じ待遇を受けた。彼らの宿館は御茶屋の少し西北の比較的低い場所であり、中官舎と下官舎と呼ばれている。正使・副使・従事官については、それぞれ自分の部屋があるだけでなく、食べ物を作る台所も別々で、通信使が上関で受けたもてなしがとてもよかったことがわかる。

今では御茶屋は姿を消しているが、幸いにも長さ約五〇メートルの石垣が残されている。これは御茶屋の正門の一部である。御茶屋が取り壊された後、その建材は町の他の建物、例えば超専寺の山門などに移されたらしい。超専寺は通信使をもてなすために萩藩が派遣した役人たちの宿泊場所である。超専寺には「朝鮮通信使船上関来航図」が所蔵されており、そこには通信使船が上関に接岸しようとしている様子や、御茶屋、中官舎、下官舎の姿も描かれている。二〇一七年には「通信使関連記録」がユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界記憶遺産に認定されたが、超専寺所蔵のこの絵もそこに含まれている。

昼ご飯の後に、上関町観光協会の安田和幸さんはまた御茶屋の石垣に連れて行ってくれた。石垣にある切欠きが昔の御茶屋の排水施設だと教えてもらう。さらに通信使による飲料水の問

題を解決するために掘られた井戸を二つ案内してくれた。井戸の周りはおかつての中官舎の位置である。もう少し西に行くと、かつての下官舎の位置である。安田さんは、『朝鮮通信使船上関来航図』に描かれた小川が、現実には小さな溝にすぎなかったが、江戸時代にはこれが境界線として、通信使の活動区域と、上関の一般庶民の活動区域を区別していたと話してくれた。『来航図』ではこの境界線をより明らかにするために、それを川のように誇張して描いたのだと言う。かつて私は通信使の道中日記を読んだ時に、彼らと日本の知識人との付き合いに対して深い印象をもったが、安田さんの話によれば、徳川幕府は意識的に通信使と一般庶民との接触を防ごうとしたようである。

久しぶりの朝鮮通信使遺跡調査を満喫して、私は楽しく京都に戻った。

(復旦大学文史研究院副研究員／国際日本文化研究センター外国人研究員)

注

(1) 今村公亮「福岡藩相島通信使関連史跡調査の近年の成果…享保四年七月二十四日大風破船・溺死を中心に」(『福岡地方史研究…福岡地方史研究会会報』五四、二〇一六年)。